

【研究ノート】

Eugene O'Neillの描く community (2)

—*Bound East for Cardiff*と*Thirst*の中の pipe dream—

高橋克依

Eugene O'Neillの描く community (2) —— Bound East for Cardiffと Thirstの中の pipe dream ——

高橋 克依

Katsuyori TAKAHASHI

目次

1. はじめに
2. 未来についての語り
3. 豊穰性の否定について
4. フィクションの効用
5. むすびに代えて

1. はじめに

本稿は、『北星学園大学文学部北星論集』第57巻第1号(2019年9月)に掲載した研究ノート「Eugene O'Neillの描く community —— Bound East for Cardiffと Thirstについて ——」に引き続き、これら2作の登場人物の人間関係に焦点をあてて、作品が提示する共同体観について、前稿以後に整理された情報について書きとめるものである。

O'Neillを論じる上で不可欠な要素のひとつである“pipe dream”を中心にすえ、目下の考察のまとめのひとつとしての役割を持たせたつもりである。

2. 未来についての語り

*Bound East for Cardiff*に登場する水夫たちに与えられている現実の厳しさは、まず、彼らの外見に、“They are dressed in dirty patched suits of dungaree, flannel shirts, and all are in their stocking feet.” (187) と提示され、また、食事への不満もそれを後押ししている。

And the dishwather they disguise
wid the name av tea! And the putty
they call bread! My belly feels loike
I'd swalleyed a dozen rivets at the
thought av ut! And sea-biscuit that'd
break the teeth av a lion if he had the
misfortune to take a bite at one! (190)
と Driscoll が述べるように、乏しい食事しか

与えられていない。生活環境は、決して彼ら自身、受け入れることはできない状況におかれている。

さらに、作業中の落下事故により、体を強打したYankは現在生死の危機にさらされ、周囲の水夫たち、さらには、船長も手の施しようのない状態である。

これらの危機的状況の中でYankとDriscollは夢を語り合う。実現の可能性は極めて低い夢である。Yankが、

It must be great to stay on dry land all your life and have a farm with a house of your own with cows and pigs and chickens, 'way in the middle of the land where yuh'd never smell the sea or see a ship. It must be great to have a wife, and kids to play with at night after supper when your work was done. It must be great to have a home of your own, Drisc. (195)

と問いかけ、それに対してDriscollは、“Laugh at you, is ut? When I'm havin' the same thoughts myself, toime afther toime.” (196) と返答する。

確かに目下の生活状況や、Yankのおかれた状況から、これらの夢の実現を予測することは誰にとっても不可能なことである。しかし、その実現可能性はさておき、このやりとりの中に、二人の間に芽生えた「強化された関係性」を読み取ることが可能である。

すなわち、登場する水夫たちは、将来の夢を語りあうことで人間同士の結束をはかり、作品はそこに共同体構築の可能性を強く示唆していることになる。

Robert Combsが、Rolf Scheiblerの言葉を引きながら、

Rolf Scheibler makes the important point that “pipe dreams,” . . . which are so fundamental to O'Neill's conception of how people endure life, do not refer

simply to illusions as such, but to the necessity of relating to people through conventions, especially improvised conventions that have symbolic meaning for those who believe in them. (177)

と述べているように、厳しい現実を生き抜くために実現不可能であれ未来に対する希望をもち、その夢の世界の実現にほのかな期待をよせるのだ。

ここに言われる“pipe dream”そのものには実現可能性はほぼない。しかし、その実現可能性の少なさゆえに、持つことを諦めるものでもない。ここにおいては、その夢を「共有」し、つながりを確認し合うことが大切なのである。

ここで*Thirst*に目を転じることとする。この作品においては、難破した船から九死に一生を得た遭難者3名が乗る救命ボートそのものが生命の危機を象徴するもの、すなわち、*Cardiff*で描かれた現実の厳しさをさらに過酷にした状況設定と言える。

*Cardiff*に倣ってこの作品を解釈するのであれば、登場人物同士が、未来の希望を共有しきれなかった結果、全員がボートから落ちて死亡するという絶望的結末が描き出されていると読むことができる。紳士の言う“I have hoped for many things in my life. Always I have hoped in vain.” (36) は、それを端的に象徴している。

こうした点から、pipe dream「共有」の試みの失敗は、過酷な状況を生き延びようとする者たちにとって、何らの利点をもたらすものではないことを訴えかけてくる。

Donald P. Gagnonは、

Clearly, the gentleman is acting as a mouthpiece for O'Neill's own fatalistic views that people cling to life sustained only by a pipe dream that some sort of salvation is possible

and that only a knowledge of a shared bond makes life bearable. (43)

と述べている。結束することが厳しい現実に行く抜くために必要なことであること、結束の構築に失敗すれば、そこに将来の希望は潰えることが見て取れる。その生きる希望とはすなわち、人間同士のつながりに対する希望であり、人と人の結束であり、すなわちコミュニティ創設に対する希望という意味で使用されているという考えが導ける。

3. 豊穡性の否定について

本章では、この時点におけるO'Neillの pipe dream 観の基盤にあるものを作品の特質、とくに登場人物が提示する状況の様々な着目して整理したい。

まず、*Cardiff*に見て取れるものは、乗員の多国籍性である。この船は、ノルウェー、スウェーデン、アイルランド、イギリスなど多岐にわたる国籍の者たちが乗り込み、かつイギリスのカーディフとニューヨークとの中間地点を航海中という設定である。つまり、乗員の置かれた環境は、多国籍を有する一方で、どの場所にも属さない無国籍性をも有したものである。それゆえ、強調されるのはその多様性、無所属性による孤立感である。人々は孤立感を深めるが故に、過去や未来に対しての認識の共有を求め、結束をはかろうとする力が生み出されるのである。

そこで、彼らのその存在の根源にある孤立性についてさらに考察してみることにする。*Cardiff*は不定期貨物船Glencairnを舞台とした男性だけの世界である。女性の乗員は登場せず、女性が話題にのぼる部分としては、冒頭のCockyの話の中のニューギニアの黒人女性と、瀕死のYankが唯一縁を感じている、カーディフのバーにいるFannyのみである。

また、YankとDriscollが夢のように語る、農場にいるべきである「妻」や、Yankが死

の直前に“A pretty lady dressed in black” (198)と語る女性など、幻想の中に浮かぶそれらもここに実在するものでは当然ない。

男たちは、女性の不在により、その生殖力を断絶させられている。すなわち、男女によって子供が産み出され、家庭という小さなコミュニティが作り出される可能性が否定された世界に生きているのである。

*Thirst*においても、類似の状況が見て取れる。事故により“Evidently he had been a first-class passenger” (31)というそれまでの外見を大いに損なっている中年紳士と、それよりもさらに“bizarre figure” (31)をさらしているダンサーとの間には、男女間の関係を想起させるものは何もない。

仮にダンサーが語った船上での出来事が事実だとして、“I think that someone kissed me. Yes, I am sure that someone kissed me.” (40)という二等航海士との「恋」も実現することはなかった。そして、ダンサーが最後に黒人水夫に体を差し出すものの、水夫はそれに関心を示すこともなかった。それに加えて、彼女が見せた上半身の裸体は、女性性を否定するように“Her breasts are withered and shrunken by starvation.” (50)と形容されている。

Glencairn, 救命ボート共に、生殖性が否定され、なおかつ食事や飲み物が欠乏した環境という共通点を持つ。つまり、生命力そのものが剥奪された世界におかれていることになるのである。

このような筋道でO'Neillのこの時点での認識を整理すると、現実の厳しさにじゅうぶんさらされた登場人物が背負うものとは、生命として豊穡に至る道を閉ざされることが宿命づけられた姿ということになる。

それでは、生命的豊穡性が絶たれた彼ら、すなわちこの時点におけるO'Neillの想念の中には、絶望しかなかったのかと結論づけるには無理がある。それは、*Cardiff*の結末

において明らかなように、家族の不在を背負いながらも、Yankの死を嘆くDriscollやCockyの姿そのものの中に、新たな人と人との結束、すなわちコミュニティ構築の兆しが示唆されているからである。

4. フィクションの効用

pipe dreamは言い換えれば妄想に過ぎない。では、pipe dreamを未来に対する妄想とした場合、過去はどうであるか。水夫たちの過去の語りや、紳士、ダンサーの語りにも何を読み取るべきなのか。

未来の妄想とは、あくまでも何もない所に話者の空想的な世界が描き出されたものである。それに比べて、過去のフィクションとは、自らが体験したものや記憶にあるものを素材として選択的に再構築したものである可能性を持つ。つまり自分の過去を脚色し、自分と周囲を納得させるものであると言える。

Cardiffに登場する水夫たちであり、Thirstの紳士とダンサーであり、非常事態において求めたものは「結束」である。夢そのものを各自が持つことだけが重要なのではない。これらの儚い夢がその周囲にいる同様の境遇を持ち合わせた人々と「共有される」ことが必要である。

そして、その「共有」の下地作りは、「未来」を語る以前に、「過去」を語る時点で形成されていたことを強調しておかなければならない。Cardiffにおいて、過去の記憶の共有の努力の第一歩は、Cookyによって試みられている。物語の冒頭、“Makin’ love to me, she was!” (187) で始まる彼のNew Guineaでの体験談の中にそれを見て取ることができる。

Cookyの話は、その地の黒人女性との恋愛沙汰という個人的な体験に基づいた「自慢話」であり、その話を聞いた周囲の仲間も、その話を信じず、嘲笑の対象としている。しかしまたCooky自身は、その嘲笑に対し“It’s

Gawd’s truth!” (187) と必死に訴えている。ここで注目すべきは、Cookyの虚実不明な自慢話に対し、周囲は嘲笑しながらも、小さな「和」を形成していることである。つまり、彼の作り上げた話は、共有される兆しを見せている。周囲の者たちは、少なくともその話で笑い合えるという共通の素地を持った者たちなのだ。換言すれば、同等な生活環境にある水夫同士によって、船首楼という閉鎖された空間の中に、小さな仲間意識（一体感）が生じていることを示す場面と解釈できる。

ここで形成された和は、やがて、作業中に転落事故をおこしたYankについての事故当時の記憶を「共有」する力へと変化してゆく。

OLSON — You saw him fall?

DAVIS — Right next to him. He and me was goin’ down in number two hold to do some chippin’. He puts his leg over careless-like and misses the ladder and plumps straight down to the bottom. I was scared to look over for a minute, and then I heard him groan and I scuttled down after him. He was hurt bad inside for the blood was drippin’ from the side of his mouth. He was groanin’ hard, but he never let a word out of him.

COCKY — An’ you blokes remember when we ‘auled ‘im in ‘ere? Oh, ‘ell, ‘e says, oh, ‘ell — like that, and nothink else. (189)

Yankの事故の共通の記憶を確認し合ったことにより、彼らは自らのおかれた環境、つまり、誰もが命の危機にさらされた過酷な生活状況にあるという共通点を確認し合ったことになる。つまり観客はここに共同体意識の萌芽を見て取ることになるのだ。

共通点の確認は、YankとDriscollの間においてもおこなわれる。Yankが、“D’yuh remember the times we’ve had in Buenos

Aires?”と問いかけ、それに対しDriscollも“I do that”と答え(196),同様のやりとり、すなわち二人の共通の記憶の確認が繰り返される。Michael Y. Bennettは、

In *Bound East for Cardiff*, Yank and Driscoll both realize that their desire to live out their lives on land is impossible in the face of Yank's all-too-true statement: “Just one ship after another, hard work, small pay, and bum grub; and when we git into port, just a drunk endin' up in a fight, and all your money gone, and then ship away again,” The death of Yank on the ship only reinforces this truth for Driscoll. (101)

と述べている。確かに夢の実現の可能性はない。しかし、それをもって悲劇的結末と解することはできるのだろうか。

Robert Combsは、

Yet the two sailors share memories of experiences that have been undeniably fulfilling, and they express love for each other in a shared fantasy of one day owning a farm together far from the sea. (177)

と述べる。共通の記憶の確認が成就したことそのものの中に、人と人との関係の新たな可能性の萌芽を感じ取るべきではないのだろうか。

一方で、不幸にして*Thirst*においては、紳士とダンサーの間の結末の試みは失敗に終わり、「敵」とした水夫共々海の中に転落するという結末をむかえる。

まず、紳士とダンサーについては、*Cardiff*の水夫たちが作り上げたような「過去の経験の共有」が圧倒的に不足している。紳士が、船からの脱出の際に財布と間違えて持ってきたというメニューについて、“This is a souvenir menu of a banquet given in my

honor by this Club.”(37)という説明を付け加え、また、ダンサーは、自身が船のサロンで歌っていた歌を、“It is one I first sang at the Palace in London.”(38)と述べる。これらに代表されるように、過去の生活歴が異なり、船の中での立場も違った二人に、過去の共通体験を求めることは、事故の経験以外にほとんど不可能であり、*Cardiff*でおこなわれているような「和の構築」ができていない。さらには、彼らの過去に対する語りそのものが、相手による検証が不可能な語りではないのである。

Abhilash Deyは

It is interesting to note that when the Dancer is at the end of her tether, she cannot forget the young Second Officer of the ill-fated ship. The face of the handsome second officer is deeply imprinted on her mind. The fact is that she fell in love with the officer, and the second officer too admired her beauty. It was the officer who managed to find a raft for her. Moreover, at the parting hour, he kissed her lovingly---the warmth of the kiss the Dancer still feels. (38)

と述べているが、この出来事そのものが実際に起きたかどうかについても、根拠を見出すことはできないことは言うまでもなく、紳士の共感はずっと得られない、ひとりよがりな語りの価値しか持たない。

ここで、タイトルの*Thirst*に向き直るとき、Deyの一文は示唆に富むものとして読める。

Though the Dancer repents her thirst for love, how she feels an urge to be reunited with the second officer--her lover! (38) (下線筆者)

thirstはダンサーが航海士に求めた愛情だけに限らない。彼女ばかりでなく紳士がフィクションとして構築した自らの過去に納得しよ

うとすること, 救いをもとめようとする事, 人と人との結束を求めようとする事, などこの救命ボートの上で去来している男女の願いが充足されない絶望感の象徴と言える。

5. むすびに代えて

本稿においては, *Bound East for Cardiff*と*Thirst*における過去, 現在, 未来それぞれに対する船上の人々の意識の共有のありさまと, 共同体構築の可能性について整理をおこなった。章内で述べたように, 2つの作品は, 共に船の事故をテーマとして扱いながら, そこにいあわせた人々の中に異なった人間関係が構築されている。彼らを支配する pipe dreamとその共有の問題は, さらに今後の考察の課題としたい。

〔引用文献〕

- Bennet, Michael Y. "Epistemological Crises in O'Neill's SS *Glencairn* Plays." *Eugene O'Neill's One-Act Plays*. Ed. Michael Y. Bennet and Benjamin D. Carson. Palgrave Macmillan, 2012. 97-111.
- Combs, Robert. "O'Neill's *Hughie*: The Sea Plays Revisited." *Eugene O'Neill's One-Act Plays*. Ed. Michael Y. Bennet and Benjamin D. Carson. Palgrave Macmillan, 2012. 175-92.
- Day, Abhilash. "O'Neill's *Driftaway*, Characters Thirst for Water, Love, Companionship and Communication: Reading *Thirst* as a Study in Tragic Irony." *The Expression: An International Multi-Disciplinary E-Journal*. Ed. Bijender Singh. Vol. 1 Issue 5 (2015): 30-40. <<http://www.expressionjournal.com>>.
- Gagnon, Donald P. "Pipe Dreams and Primitivism: Eugene O'Neill and the Rhetoric of Ethnicity." Diss. U of South Florida, 2003. <<https://scholarcommons.usf.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=2366&context=etd>>.
- O'Neill, Eugene. "Bound East for Cardiff." *Eugene O'Neill: Complete Plays 1913-1920*. Ed. Travis Bogard. Library of America, 1988. 185-199.
- . "Thirst." *Eugene O'Neill: Complete Plays 1913-1920*. Ed. Travis Bogard. Library of America, 1988. 29-51.